

# 新自由主義・ジェントリフィケーション概念の適確さを問う

## ——サービスハブ論を中心に——

コルナトウスキ・ヘラルド\*

Geerhardt KORNATOWSKI

Interrogating Neoliberalism and Gentrification as Appropriate Concepts:  
A Perspective from the Theorization of "Service Hubs"

### 1. はじめに

序言にあるように、ジェントリフィケーション概念からの地域への理解のすれ違いやファクトチェックの欠如、相互理解の不足、つまり釜ヶ崎が持つ様々で独自のニュアンスやその全体像があいまいになってしまい、特に近年、多数の相反する見方が目立つようになった。本稿では、こういう問題がいかにか批判的都市研究の中で議論されているかを簡潔に整理し、ノヴァック論考の中心的概念である新自由主義・ジェントリフィケーションの妥当性を問う。とはいえ、新自由主義・ジェントリフィケーション概念を否定するというよりも、批判的都市研究の中で顕在化しつつあるこの両概念の無批判的採用とその研究フィールドに対するインプリケーションを検証するのが目的である。それから、ジェントリフィケーションを受け易いであろう(インナーシティの)フィールドへのもうひとつのアプローチとして、サービスハブ概念を中心としたフレームワークを提示する。

### 2. 新自由主義の特徴としてのジェントリフィケーション

ノヴァック論考によると、現在大阪(の南エリア)で新自由主義的なジェントリフィケーションが進行しており、釜ヶ崎は、「衰退した労働者階級の文化のシンボルである釜ヶ崎は、近現代の日本社会における新自由主義的な変容に対する生きた批評である(本特集松井訳, 177)」ととされている。こうした状況の中で、「文化芸術団体は、新自由主義的な再生事業の仲介者として、いかにして自分たちの今ある立場を考えることができたのだろうか(本特集松井訳, 180)」という問いが主な検討目的である。最も問

題とされるのは、文化芸術団体は、ジェントリフィケーションの最前線において、創造都市が求めている地域にしか存在しない創造力を活かそうとしているが、そのビジネスモデルが極めて不安定であることに加え、地域の根本的問題である貧困へのクッション役しか果たせていないことである。つまり、文化芸術団体による活動は、徐々に釜ヶ崎から排除されている「おっちゃん」たちの心の支えにしか過ぎなく、新自由主義の飼い犬のような存在となっている。と。このように、かなりダークな現実が描かれており、釜ヶ崎という街がジェントリフィケーションによって姿を消していくであろうと思わせられる。

しかし、読者としては、いくつかの疑問点を持つことになる。例えば、大阪、または釜ヶ崎における新自由主義・ジェントリフィケーション過程の正体とは何か? 新自由主義・ジェントリフィケーションを視角にして、普段見てこないことは何か? 逆に、新自由主義・ジェントリフィケーションから見る際、見落としやすいことは何か? などである。本稿では、こうした疑問について考察し、ノヴァック論考の背景として位置づけてみる。そのため、まず、新自由主義・ジェントリフィケーション概念の学術的背景を整理し、近年批判的都市研究者による両概念に対する学術的反響に触れる。さらに、こうした批判的社会科学分野内から指摘されたことを参考しながら、両概念の弱点の克服に積極的に取り組む「サービスハブ概念」に基づいたフレームワークを提案する。

まずは、新自由主義という概念に関する議論を紹介する。

#### 2.1. 何がどこまで新自由主義都市なのか?

本誌20号のStorper (2016=2017: 110) が指摘する

\* 九州大学

ように、新自由主義という概念が、「資本主義自体そのもののいかげんな同義語、あるいは、世界経済とその不平等の一種の略語」として研究でよく採用されるようになり、「新自由主義に批判的な文献は、現実世界の公共政策を評価・ラベリングすることを広く誤り、そしておそらくもっと重要なことに、その原因を突き止めることを広く誤り、不気味な反資本主義のドラムビートをもたらししてしまう」傾向を問題視に入れている。さらに、特に都市ガバナンスに関する研究の中では、公共政策の実践的な側面（または、その背景にあるステークホルダー間の交渉過程）を視野から外すことも顕著であり、「分析に使う主力商品」のほずであった新自由主義概念は、単にイデオロギーに陥って、現場の実証的なコンテキストと離れる傾向もある。筆者にとっても、これは重要な指摘であり、批判的都市研究の（マクロな）基盤である「資本の蓄積過程＝経済成長を優先するガバナンス」からすると、成長の仕方としては、必ずしも奪略や排除などを中心とした報復主義的新自由主義政策という選択肢しかないわけではない。より詳細に後述するDeVerteuil (2016)の研究も、こうした意識から、「完全な新自由主義」は、特に都市スケールでは、実質的に存在できないリアリティも主張しており、逆に、そもそも新自由主義がカウンターバランスとして必要とする（コモンズなどの形をとった）寛容なアプローチも、分析範囲に入れる必要があると述べる。したがって、現場では、新自由主義（それとも寛容なアプローチ）による一方的な政策方向がそもそも考えにくく、むしろその間の実用的な妥協関係が常に交渉されていると考えられる。

本来、新自由主義による社会的な秩序や統合は、「個人の責任、家族、または宗教のみに由来するべき」とよく述べられる (Storper 2016=2017: 114)<sup>1)</sup>。しかし、単身の生活困窮者への専門的な支援サービスが最も充実している釜ヶ崎という（ボランティア団体と公的）支援集積地でも実際にそうなっていると言えない。むしろ、行政、ボランティア支援団体、および生活保護によって包摂への取り組みが背景に機能しており、新自由主義的な秩序と異なり、むしろ共同体をベースにした秩序によって日常生活が（限定的でも）支えられているといえる。

とにかく、新自由主義を方法論として援用している従来の批判的都市研究の中では、市場メカニズムや民間活動への偏りを示しているアプローチが顕著であり、こうした規範的な偏りは、社会科学を歪めうる可能性もある。さらに、政策や現場での実践を

めぐる複雑な語用論に対する注意も欠けていることが多い。近年の東アジア都市研究の中でも、こうした偏りを反駁する声が増えている。その中で、Buckingham (2019: 298) は、近年、中国の都市研究でますます見られる新自由主義的なアプローチについて警鐘を鳴らしている。とりわけ、方法論として新自由主義は、複雑な社会関係が都市（社会）空間を構成させたことや、すべての都市問題を新自由主義のせいにする学術的な売りというその都市研究の方向性を嘆いている。とりわけ、濃い共産主義の歴史を背景にしている中国では、未だに、（解放された）市場というより、その場所での国家・自治体との歴史的な関係がローカルガバナンスの風習や社会的公平性への見方を形成させているとされる。したがって、すべての社会的関係がグローバル資本の行方に従っているわけではなく、地域特有な政治的過程が果たしている役割の重要性にも注意すべきなのである (同2019: 311)。

しかし、なぜ東アジア都市研究の中では、新自由主義という方法論がそんなに流通されるようになったのか。この問いに答えようとしている関連文献を見ると、主に二つの理由が考えられる。第一、Buckingham (2019) も述べるように、最も包括的に新自由主義的都市ガバナンスを研究してきたPeck & Tickell (2002)やBrenner & Theodore (2002)が批判的都市研究に対し呼びかけた「実際に存在している新自由主義」の追究による影響である。この呼びかけに応じて、ローカルな都市政治過程を新自由主義としてとらえ直す都市研究が増えた一方、方法論としては、徐々にルーズになったといえる。つまり、研究のフィールドで新自由主義と言えそうな影響がそもそも顕著か否か、ではなく、顕微鏡を持ったように、あるフィールドはどこが新自由主義かを積極的に検討するような偏ったアプローチが生じた。

第2、DeVerteuil (2016) などが指摘している（一つの理論を追究している）批判的都市研究のスケールアップである。これに関しては、「プラネタリー」という新しいキーワードが出ており、全世界が（マクロ経済のスケールで）新自由主義的論理に置かれているとともに、全世界の都市化過程も同じ論理に従って、グローバル性を持った「ジェントリフィケーション」が進行していることが着目されるようになった。そして、その中で、いわゆるニューヨークや東京のような典型的なグローバル都市がそのショーケースとなっている。しかし、こういうアプローチによっては、資本の投資過程からの観点が主となっており、地域・フィールドでの詳細な取り組

み(=主体)への着目がどうしても薄れる傾向を示している。

次節では、地域スケールに着目し、新自由主義がもたらす都市社会空間への(悪)影響の分析ツール(方法論)としてのジェントリフィケーションに関する議論を取り上げる。

## 2.2. 「ジェントリフィケーション」への批判

批判都市研究の代表と言ってもよいニール・スミス(例えば、Smith 2002)がジェントリフィケーションを新自由主義の特徴と、そして、街の社会的上方を目的とした報復主義なガバナンスツールとして考察したあと、新自由主義とジェントリフィケーション概念が相互的な分析ツールとして人気度があがったといえる<sup>2)</sup>。方法論としては、極端的にいうと、ジェントリフィケーション現象が新自由主義の存在を検証すると同時に、新自由主義現象がジェントリフィケーションの存在を検証するツールとなった。多くの場合、奪略や立ち退きがその中心にある。

一方、プラネタリー・ジェントリフィケーションを概念化したShin et al. (2016: 457) からもすると、ジェントリフィケーションが決して新自由主義だけの特徴ではなく、むしろ、成長を絶対的前提にしている、本質的に資本主義社会の特徴でもあると考えている。その結果、都市には、資本蓄積を実現させるために、自らの空間(建造環境)を常に変容させてはならない宿命が与えられている。つまるところ、地域再生や(再)開発などにより、都市更新は永遠に続くものであろう。しかし、これによって、必ずしも奪略・立ち退きを目指した、階級闘争の形をとった「ジェントリフィケーション」が進むわけでもない。以下、いくつかの議論を取り上げ、ジェントリフィケーションの複雑さに注目したい。

まずは、Tang(2017)による、香港旧市街地における激しい再開発をジェントリフィケーションとしてとらえ直す文献への批判である。とりわけ、(Tang論考の中では参照されていないが、)Storper(2016)と同様に、「自らの世界観を通じて(都市)風景を読もうとする社会科学」に問題があるとし、特に「ローカルな土地・資産(の歴史的)関係を無視する」傾向が著しいと指摘している(Tang 2017: 496-7)。その結果、香港における多数の再開発事業によって労働階級がますます排除されているという勝手な見方が多いに対し、Tang(同)は、香港の空間的歴史を主張し、高密度を優先してきた香港の土地開発がそもそも階級の線引きを超え、消費者功利主義をベースにした空間的解決ツールとしてのハウジングの役割が、む

しろ都市ガバナンスのポイントとなっていることに基づき、ジェントリフィケーション研究に反論している。その中で、単に資本蓄積過程を目指した(再)開発ではなく、社会安定を目的とした「主体性」や「識別できる開発的論理」を考慮したアプローチが必要とされている。実は、Tang(同)による、(特に東アジアの都市空間的コンテクストを無視しがちな)ジェントリフィケーション概念への批判は、次のエピソードにも反映されている。

「2011年12月ニール・スミスが香港を訪問したのを特に覚えている。(私が立ち上げた)香港批判地理学勉強会で『報復主義都市・報復主義惑星』という講演をいただいた。(香港旧市街地の代表的なインナーシティとして知られている)Sham Shui Po地域で見学を行った時、同地域の…独特な特徴を説明したにもかかわらず、ニール・スミスは、毎回高層新築マンションを見るたびに、『これもジェントリフィケーションだ、あれもジェントリフィケーションだ』と容赦なくコメントしていた」(Tang 同: 496-497)。

上述したShin et al.(2016)も、社会的上方に伴う下の階級が立ち退かされるプロセスに焦点を当てているが、都市(再)更新の様々都市過程や開発基盤の歴史性の重要性も主張しており、決して、欧米モデルのジェントリフィケーション(=特にニール・スミスが検討していたニューヨークモデル)がそのまま、一方的に東アジアに導入されているわけではないと述べる。また、(プラネタリー)ジェントリフィケーションの中心と考えられる(第2循環的<sup>3)</sup>な)資本蓄積・街の美化・建造環境への投資・階級分析へを共通点があるとしても、これに対する「集合消費」を目標としている闘争への着目もアピールしている。ゆえに、そもそも「集合消費」がジェントリフィケーションに対しどのような役割を果たしうるかも視野に入れる意義があると思われる。

その延長で、近年、ジェントリフィケーションの決定的な特徴とは何かという議論が激化している(例えば、Elliot-Cooper 2019とLees et al. 2016)。これらの中では、奪略・立ち退きをその決定的な特徴とすべきかの議論が進んでいる一方、同時ジェントリフィケーションに対する主体性や防波堤的な仕組みへの着目も顕著となっている。Elliot-Cooper(2019)は、単なる物理的な立ち退きの範囲を超え、心理的な「立ち退き」も含む「アンホームングUn-homing」までの概念を必要としているが、実際にこうした「立

表1 社会科学的概念としてのジェントリフィケーション

<b>【定義】</b>
①住民の立ち退きを引き起こすメカニズム
②土地の再価値形成(revalorization)
③資本蓄積や美化を目的とした土地の商品化・土地再利
④地域の社会的上方化
⑤不動産資本による地域侵入や地域への投機活動
⑥地域(社会的)構成の変更をもたらす建造環境向けの投資活動
⑦階級闘争の空間的事象(地域の階級再構成class remaking)
<b>【主な形態】</b>
①市場による漸進的な地域更新(market-led)
②国家・自治体による大規模な(再)開発(state-led)
③官民のパートナーシップによる地域再生・活性化(public-private-led)
④体制内方式に基づいた街づくり(co-opted)
⑤心理的な疎外感を引き起こす「アンホームिंग」("un-homing")
⑥スティグマ化された集団の不可視化(invisibilization) ※DeVerteuil 2016
<b>※【主な対抗手段】</b>
①団結型反対運動・抵抗
②集合消費の要求
③地域内再居住
④サバイバービリティ(立ち退きによるプレッシャーに適応する工夫)
⑤レジリエンス(立ち退きを防ぐ工夫) ※DeVerteuil 2016
⑥自己隔離(self-segregation) ※DeVerteuil 2016
<b>※【立ち退きに対する主な反論】</b>
①労働階級の縮小による階級交代(class replacement) ※Hamnett 2009
②借地借家権の保護(tenure protection) ※Hamnett 2009
③剰余人口を積極的に受け入れる安息所(havens of acceptance) ※DeVerteuil 2016

出典：Shin et al (2016)、Elliot-Cooper (2019)、Lees et al. (2016)などを参照して筆者作成

ち退き」をどのように(詳しくは本特集の松尾翻訳を参照されたい) 図ることができるかが問題点である(「どうデータに基づくか?」)が、ジェントリフィケーションが(新自由主義と同様に)非常にカオス的な概念となっている事実からこうしたアンホームングを提示している背景もある。さらには、立ち退きを直面している当事者も、単なる被害者ではなく、ジェントリフィケーションの抵抗できる主体を有していることも注意を払っている。

Lees et al. (2016)も、こうして、今まであまり着目されてこなかった主体による抵抗のダイナミクスを詳細に追究している。とりわけ、抵抗を「サバイバービリティsurvivability」として概念化し、特に奪略・立ち退きを直面している当事者による抵抗に関しては、グローバルサウスにおけるインフォーマルなコミュニティ(スクォッター地区など)とそこにおける日常生活パターンを参考にし、普段この目で視認されない、対抗らしからぬ対抗過程のポテンシャルを考慮している。その中では、「互助mutual self-help」や「自営イニシアティブを中心とした自助self-help」などの様々な方法が取り上げられ、(インナーシティなどの)空間を通じたジェントリフィケーションへの「非対立的な」抵抗の重要性が主張される。

すなわち、Lees et al. (2016)の論考から見えてくることは、ジェントリフィケーションが民間・国家を中心に必ずしも一方的に展開されているだけではなく、いわゆるインフォーマリティーも、目立つ形ではなくても、影響力を持つアクター(後ほど「象限」とする)として積極的な役割を果たしていることである。

最後に、上述したDeVerteuil (2016)を取り上げる。彼も、新自由主義・ジェントリフィケーションに抵抗する過程に着目し、これを「レジリエンス」として概念化しているが、インフォーマリティーも視野に入れつつ、第三セクターというアクターを研究対象にしている。フィールドをロンドンとロサンゼルスとシドニーの各都市にあるいくつかの「サービスハブ」として知られているインナーシティ地域という空間的ユニットに絞っており、4つのジェントリフィケーション過程を類型化している<sup>4)</sup>。英語圏コンテクストではありながら、都市スケールでの新自由主義を見る際に、次のように述べる:「未完成な新自由主義が顕著であるインナーシティでは、ケインズ主義時代の福祉の配置を守り続けている、置粘り強い支援ネットワークが存在しており、(地域単位には限られていても)実用的なコモنزとして機能する潜在力を有している」。すなわち、彼にとっ

ては、その最前線に位置している第三セクターの配置が、生活困窮者の「受け入れの安息所haven of acceptance」として空間を維持し続けており、ジェントリフィケーションへの防波堤としてみることもできる。もちろん、こうした地域にある目に見えやすい貧困の集中がスティグマの決定的要因もあり、そもそもジェントリフィケーションにかける(大)資本にとっては、投資のインセンティブが低いも考えることもできる(まとめとしては、表1を参照されたい)。

サービスハブ地域は、ノヴァックも述べる「社会的に見捨てられた地域(本特集松井訳, 179)」のような風景に見えても、実際、そうした現実ばかりでもない。むしろ、第三セクターを代表する諸支援団体は、こうした地域に豊富な社会資源が大いに活用しており、支援を必要とする誰でも地域へ受け入れられるポテンシャルを有しており、こうした資源にベースしたさらなるノーハウを活かし、ジェントリフィケーションに抵抗する力も発揮し続けている。以下、サービスハブ概念に基づいて、上記で識別した①市場、②国家・自治体、③第3セクターと、④インフォーマルなコミュニティというそれぞれのアクターを位置づけたフレームワークを提案し、新自由主義・ジェントリフィケーションを用いた視角への、異なる角度から得られる意味合いを考察する。

### 3. サービスハブ論について

図1は、上述した4つアクターとジェントリフィケーション(の在り方)との関係性を図化したフレー

ムワークである<sup>5)</sup>。

マクロな動態(建造環境への投資など)を(批判的)分析基盤とする新自由主義・ジェントリフィケーション研究は、主に第1象限に限られており、むしろグローバルな政策論のコンテキストからフィールドを分析することが多い。もちろん、一つだけの象限に集中すること自体は、必ずしも不適切ではない。やはり、一つのリアリティに絞り、詳細に分析することによって、新しい知見を得ることも可能である。その一方、第1象限のみでフィールドを捉えようとする方法論は、限定的な側面もあり、結果として、様々な誤解、そしてイデオロギーラベリングを招くこともあると考えられる。すなわち、上述した新自由主義・ジェントリフィケーションへの批判からすると、他の象限から得られる多くの知見が見失われてしまい、偏った現実の疑いが生じうる。なお、多くの批判的都市研究で指摘されているように、市場原理主義(=新自由主義)を重視したガバナンスに関しては、第2象限の役割も強く、そのリンクが多面的に追究されてきたといえる。ジェントリフィケーションに関しても、このようなリンクから、「国家主導のジェントリフィケーション」などというジェントリフィケーションの類型が作り出されている。一方、公営住宅などを提供している、(新自由主義が普遍敵としている)政治過程を経た再分配システムは、先進地域において未だに重大な特徴でもある。もちろん、特定の地理によっては、各象限間におけるそのバランスが異なるともいえる。

次は、よりミクロ・インフォーマルなスケールである第3・4象限を取り上げよう。DeVerteuil (2016)

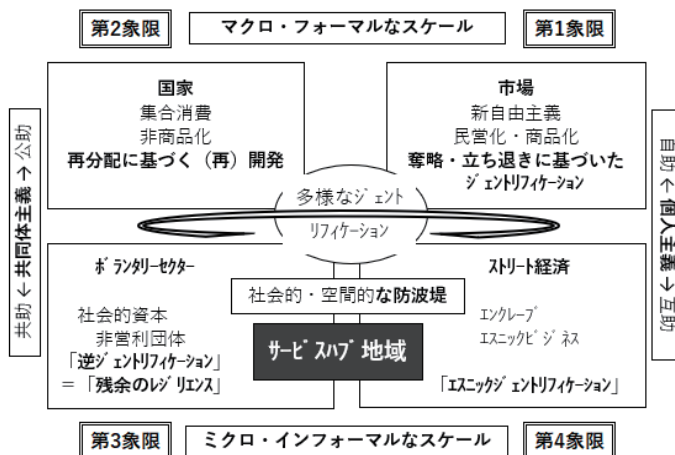


図1 サービスハブ概念を中心としたフレームワーク

やLees et al. (2016) によって指摘されているように、両象限が(場合によっては第2象限とコラボしている)第1象限的なジェントリフィケーションへの防波堤役となる潜在力も有している。これも、ローカルなコンテキストによって、その実態が様々であるからこそ、ローカルなバリエーション(の地理)を視野に入れる必要があるであろう。ここでは、DeVerteuil (2016) が描くロサンゼルス事例を取り上げてもよい。そもそもはっきりした都心部がない独特な都市空間構造を有しているロサンゼルスは、「移住者のゲートウェイ都市」として有名であり、インナーシティの特徴を持つ地域では、ラテン系移民が数多く集住し、なお地価が高いにもかかわらず、グローバルサウスでもよく見られる「過密住居」などの方法を通じて粘り強い存在となっており、ジェントリフィケーションが及ばず奪略・立ち退きが(ニューヨークやロンドンと異なり)、顕著ではない。もちろん、こうした「過密住居」は、例えばWetzstein (2017) などが述べるような(特にグローバル都市で進行されている)ハウジングアフォーダビリティの課題が取り上げられるが、ここではジェントリフィケーションが及ばず奪略・立ち退きにとどめておきたい。また、第三セクターの様々な支援団体も同じインナーシティで相互的な連携クラスタリング(=サービスハブ)を通じ、未だに活動拠点が守り切れている。その中では、最も有名なサービスハブであるスキッドローという事例もある。ともかく、このようなサービスハブ地域やエンクレイヴ地域が、いつでも展開されうるジェントリフィケーションという「危険threat」に対し、一方的に(奪略・立ち退きなどの)被害を受けるのではなく、むしろアクティブな空間として整備できており、ロンドンやニューヨークでよくみられるアグレッシブな(「ハイパージェントリフィケーション」ともいわれる)と未だに異なる。

しかし、釜ヶ崎の場合は、これは具体的にどうなっているのだろうか? または、文化芸術団体が各象限においてどういう性格を身に付けているのか? こういう実証的な側面はまたの機会に譲りたいが、ここでは、序言や後段の上田論考、中川論考にあるように、多様な「地域再生」のイニシアティブが同時に実施されている動態に注意したい。つまり、2018年以降「サービスハブ」という概念を積極的に採用している西成区の取り組み(第2・3象限のコラボ)、そして中華系不動産屋が進めようとしている「チャイナタウン」の試み(第4象限的な「ジェントリフィケーション」)が実際に興味深い。その中でも、壊された

フェスティバルゲートの次に星野リゾート企画が最も第1象限的な侵略として懸念されており、さらに、簡易宿泊所組合が進めてきた「バックパッカーホテル」もこうした目で見られることが多いと思われる。しかし、これらは、実際に釜ヶ崎というインナーシティ地域を奪っていく展開というよりも、人口減少や空き家の増加に対する「再密度化redensification」として考えることもできる。とにかく、ポイントなのは、様々なステークホルダーによって、街づくりのプラットフォームに参加し、必ずしも新自由主義的なアプローチと言いつつもお互いの利害を念頭に入れた交渉の下に、なるべく相互的なバランスを図ろうとされているという釜ヶ崎独特なプラットフォームシェアリングが構築されていると思われる。

#### 4. 結論

第1象限的なジェントリフィケーションから地域を捉え(直)そうとする際に、ノヴァック論考が述べる「釜ヶ崎においては、どんな手段を取っても、なかなか再生のイメージを想像することはできない(し、)月日がすぎて歴史的な戦後社会の構造は遙か彼方に色あせてしま(う)(本特集松井訳, 185)」というダークな未来像がリアルに浮かんでくる。とりわけ、日本のアーバンコンテキストとして顕在化している都市回帰過程、そして、この現象に伴う都心部やインナーシティ地域の建造環境への投資プレッシャーと、これに伴う政治に関しては、批判的都市研究が今まで非常に示唆的であったと思われる。しかし、すべての地域が「同じような形式cookie-cutter pattern」で、(大)資本の影響を受けて、単に一定式的に変わっていく(=ジェントリファイする)かどうかは、上述したように、議論の余地はある。水内(2019)は、大阪市の都市回帰の諸相を、多様なジェントリフィケーションを見据えつつ論じているが、研究としてはまだまだ少数である。むしろ、地域の潜在力にも着目し、ジェントリフィケーションを可能にする歴史的な基盤整備(例えば、ノヴァックによっても取り上げられた阿倍野区のような、さらなるジェントリフィケーションが起りやすい地域)の一方、新規のジェントリフィケーションの侵入への防波堤的な力がそもそも顕著である釜ヶ崎や生野区のようなエンクレイヴ地域の歴史的な基盤整備と、それぞれに関する資本・行政・住民とのユニークな関係性(=多様なカウンターバランス)への考慮もこ

れから批判的都市研究に期待したい。さらに、同研究の中でかなりな勢いで広がっている「プラネタリー・ジェントリフィケーション」や「プラネタリー都市化」などという都市空間を最前線にしたグローバルな資本蓄積過程から見る際も、ローカルなコミュニティ・地域が実際にどのようなリアクションを發揮し、自らの利害を守ろうとしているか視野に入れていただきたい。これに関しては、DeVerteuil (2016)が指摘するように、具体的に変容は時間と空間のコンテキストで起こることからすると、同時に変容する地域文化観がどのような表象に変わっているのか、それを文化芸術団体がどのようにピックアップしているかに対し、多様な視角があると思われる。その中の一つの表象がノヴァック論考によって詳細に取り上げられているが、本稿で整理した概念的議論を念頭において読んでいただければ、その(第1象限中心の)位置づけがさらに明確に読めると期待している次第である。

## 注

- 1) ノヴァック論考では、同じように、新自由主義における個人や地域などの「責任化responsibilization」について触れられている。
- 2) 例えば、Smith (2002)。
- 3) 資本蓄積過程の第1・2循環について、詳しくは本誌の原口 (2018)を参照されたいが、Tang (2017)は、香港がそもそも第2循環でできた都市と解釈しており、近年激化している香港旧市街地への第2循環的な投資がジェントリフィケーションの証明として見極められているジェントリフィケーション研究も不適切であると述べる。
- 4) この類型は実に興味深い。ジェントリフィケーションの時期的コンテキストやジェントリファイヤーの性格などを考慮し、DeVerteuil (2016)は、類型化を援用している。どれも略奪・立ち退きの危険threatが潜在しており、地域の社会的上方を引き起こしている：①比較的に早い段階で行われた、ある程度従来の社会的配置を配慮した「確立型ジェントリフィケーションestablished gentrification」。後続のジェントリフィケーションの基盤が強い。②「混合型ジェントリフィケーションmixed gentrification」。そもそも行政直営の資源(公営住宅など)が多く、民営化などによってその配置が変容しつつある地域。③従来の社会的配置を配慮しない、特に近年進められている、ややアグレッシブな「先駆的ジェントリフィケーションpioneer gentrification」。釜ヶ崎の場合は、星野リゾート計画を参考にしてもよい。多くの批判的ジェントリフィケーション研究は、この先駆的ジェントリフィケーションを対象にしていることが多いといえる。④典型的なジェントリフィケーションを受けにくい、社会経済的なネッ

トワーク基盤が強い移住者集住地区「移住者エンクレーヴimmigrant enclaves」。行政によるサポート制度(公助)と住宅市場を(集団的に)操作すること(互助)が主な抵抗方法として取り上げられる。

- 5) 水内・福本(2017)と水内他(2019)も参照されたい。

## 参考文献

- 鯉坂学・西村雄郎・丸山真央・徳田剛編著 (2019) 『さまよえる大都市・大阪——「都市回帰」とコミュニティ』東信堂。
- 原口剛 (2018) 「プラネタリー・ジェントリフィケーションについてのノート」『空間・社会・地理思想』22: 157-161。
- 水内俊雄・福本拓編 (2017) 『都市の包容力——セーフティネットワークシティを構成する』法律文化社。
- 水内俊雄・福本拓・コルナトウスキ ヒェラルド編 (2019) 『グローバル都市大阪の分極化の新たな位相——日本型ジェントリフィケーションの多様性』URP「先端的都市研究」シリーズ17、大阪市立大学都市研究プラザ。
- 水内俊雄 (2019) 「インナーシティはジェントリフィケーションにどう向き合うか」、『市政研究』204: 30-45
- Brenner, N. & Theodore, N. (2002) “Cities and the Geographies of “Actually Existing Neoliberalism””, *Antipode* 34(3), pp. 349-379.
- Buckingham, W. (2017) “Uncorking the Neoliberal Bottle: Neoliberal Critique and Urban Change in China”, *Eurasian Geography and Economics* 58(3), pp. 297-315.
- DeVerteuil, G. (2016) *Resilience in the Post-welfare Inner City: Voluntary Sector geographies in London, Los Angeles and Sydney*, Bristol: Policy Press
- Elliot-Cooper, A., Hubbard, P., Lees, L. (2019) “Moving beyond Marcuse: Gentrification, Displacement and the Violence of Un-Homing” *Progress in Human Geography* (online version), pp. 1-19. 本号特集で、松尾卓磨によって翻訳されている。「マルクゼを超えて——ジェントリフィケーション、立ち退き、アンホームングの暴力性——」
- Hamnett, C. (2009) “The new Mikado? Tom Slater, Gentrification and Displacement”, *City*, 13(4): pp. 476-482.
- Kiener, J., Kornatowski, G., Mizuuchi, T. (2018) “Innovations in Gearing the Housing Market to Welfare Recipients in Osaka’s Inner City: A Resilient Strategy?”, *Housing, Theory and Society* 4, pp. 410-431.
- Lees, L., Annunziata, S., Rivas-Alonso, C. (2017) “Resisting Planetary Gentrification: The Value of Survivability in the Fight to Stay Put”, *Annals of the American Association of Geographers* 108(2), pp. 346-355.
- Novak, D. (2019) “The Arts of Gentrification: Creativity, Cultural Policy, and Public Space in Kamagasaki”, *City & Society* 31(1), pp. 94-118. 本号特集で、松井恵麻によって翻訳されている。「ジェントリフィケーションにおけるアート活動—創造性、文化政策、そして釜ヶ崎の公共空間について—」
- Shin, H.B., Lees, L., Lopez-Morales, E. (2016) “Introduction: Locat-

- ing Gentrification in the Global East”, *Urban Studies* 53(3), pp. 455-470.
- Smith, N. (2002) “New Globalism, new Urbanism: Gentrification as global urban strategy”, *Antipode* 34(3): pp. 434-457.
- Storper, M. (2016) “The Neo-liberal City as Idea and Reality”, *Territory, Politics, Governance* 4(2), pp. 241-263.
- 菅野拓 (2017) 「アイデアとしての新自由主義都市、現実にある新自由主義都市」『空間・社会・地理思想』20：109-126。
- Tang, W.S. (2017) “Beyond Gentrification: Hegemonic Redevelopment in Hong Kong”, *IJURR* 41(3), pp. 487-499.
- Wetzstein, S. (2017) “The global urban housing affordability crisis”, *Urban Studies* 54(14), pp. 3159-3177.